

去る八月二十五日に行なわれた思想の科学研究会による「戦後史の遺産」の継承をめぐっての討論では、戦前・戦中・戦後の世代間の統一戦線の創出、反体制運動内部の思想形成の課題など、現在“混迷”の中にあるわれわれの思想戦線にとって、多くの示唆を与える問題点が提示された。本誌9月2日号で、この討論の模様を紹介したが、当日の報告者の一人としてこれらの問題点を提示した見田宗介氏に、現在の状況を規定している戦後体験の意味と、これからの思想形成の課題について、あらためて論じてもらった。(編集部)

あばばばばばあ

ハハハハハハハハ

ほーら、赤ちゃんが初めて笑いましたね

さあ、今から進学準備の貯蓄です……

(山一証券のコマーシャル)

◎戦後が終わったことの不快さ

「幼稚園から大会社まで」規格化された人生のパターンが人びとの心をとらえ、体制の用意するワクグミの中でぬくぬくとした幸福のイメージがよどむ今日、今もなお「戦後は終わっていない」などとしようこりもなくくり返す、時計の錆びた進歩的文化人たちとは逆に、戦後が一九五二年かそこらに早ばやと終らされてしまったことの不快感から出発して戦後史を考えてみたい。

敗戦をまずなによりも「ショック」としてうけとめたらしい世代の体験は、一方の極にアメリカン・デモクラシーやソヴェト・コミュニズムへの無条件転向をもたらすと共に、他方の極には理論体系や政治的世界一般への無差別的な不信の念を生み出してきた。

いつの世にも既成のテーゼをうのみにする実務インテリや政治主義者は論外として、かの世代の最もよき思想家たちは、「政治と文学」、「組織と人間」を対立項に仕立てあげたり、「一切の正論への不信」を表明したりしてアンチテーゼの自己目的化におちこんでいる。このような状況を断ちきる思想の原動力をわれわれはどこに見出しうるであろうか。

◎原体験と小体験との対決で

体験は一般に generative（生産力のある）なエネルギーとして活用される時にはじめて意味をもつ。いわゆる〈原体験〉というものは、このような generative なエネルギーをすぐれてもっている体験として定義しうる。原体験はその後の年月のさまざまな小体験との無数の対決をつうじて、じつくりとその意味を展開していくと同時に、本当の意味での歴史形成力を発揮していく。このような、generative なエネルギーとしての時代体験を共有する集団として、世代を定義することができる。

世代とは、このようなまさに generation mechanism 思想の生産装置を共有する集団である。したがって、時代によって世代が形成される過程と、世代によって時代が形成される過程との間にはズレがある。いいかえれば世代体験は、それぞれの充電期と発電期とをもっている。

戦後体験の充電期としての戦後状況は夭折してしまったけれども、戦後体験はむしろこれから発電を開始すべき潜勢力としてわれわれの内に活きている。「戦後史の遺産」はしたがって、われわれがこれから形成すべき未定の遺産として存在する。

◎戦争世代の思考方式の批判

時代体験を遺産に転化する一つの巨大な試みとして、われわれの前に、戦争世代による戦争体験の遺産化の試みがある。体験をまるごと実感として継承することは絶対に不可能である反面、体験を遺産に転化する方式は継承しうるし、またさらに普遍的な方法論として次に来る世代に残しうる。したがってわれわれ戦後世代は、戦争体験の内容をまるごと継承するのではなく、戦争世代が戦争体験を思想化してきた方式を批判的に摂取することによって、われわれ自身の戦後体験と、現在の大衆社会状況に対して創造的に適用していかねばならない。

そのさい「戦中派」の方式に対してわれわれが感じるメメシサは、安田武氏が誤解しているように、彼らが体験に固執するからではない。固執すること自体はむしろ好ましく「雄々しい」ことでさえある。問題は固執の仕方にあるのだ。「おれはもうしゃべることにはうんざりしている」「私はもう何も語りたくありません」などと言っているそのそばから、またもや思い出話をはじめのような、そういう固執の仕方。原体験を現在の状況とかみあわせることによって現実化し、そのことによって遺産化するというルートをとらずに、体験をそのま

ま「語り伝える」という安易なルートにしがみついていることを女々しいと感ずるのである。

人間に追体験の能力がある以上、体験には伝承可能な部分もあるので、そういう努力も決してムダではないだろう。しかし体験のもっている、generativeなエネルギーの核のところは、本人以外には絶対に伝達不可能であり、その世代の死滅と共に死滅する。と、すれば、体験のもつ潜勢力を最大限に活かす道は、現在目の前に起っている問題の解決に、体験からえられたパースペクティヴを、たえず意識的に活用すること、現実の状況を把握し変革するための用具として体験を動員することをとおして、歴史的事実ないし文化的世界の中に刻印を残すことしかないであろう。体験「について」語るのではなく体験「によって」語ること、体験をテーマとしてではなく体験をモチーフとして活かすことである。

◎世代間の異質的統一戦線を

それでは戦後体験を、われわれはどのような方向に活かしようか。活かさなければならぬか。——一九三一年頃から五二年頃までを近代日本の「危機の時代」として一括してとらえることができる。この二十年間に日本人が経験した限界状況と価値転換の体験は、人類史上まれにみる大規模なものであったし、したがってまた、莫大な generative energy を潜在的にもっている。

そのひとかたまりの国民的体験のいわば三つの局面として、戦前体験・戦争体験・戦後体験があるという風に考えてみよう。この二十年間の国民的体験を日本民族の原体験として活かし、人類史の遺産に転化する作業の中で、この国民的体験にコミットしたいいくつかの世代が、それぞれに固有の課題、固有の役割をもっている。

したがって肝心なことは、世代相互で断絶と優越を誇示しあうことではないことは勿論、また逆にそれぞれの世代に固有の体験を忘れ去ることによって同質的な統一戦線をくむことでもない。それぞれの世代がそれぞれの原体験にあくまでも固執しながら、しかもその固執することをお互いに認め合いながら、世代間の異質的な統一戦線をくむことこそが必要である。統一をくむことによってそれぞれのパートが独自の輝きを失うのではなく、ますます独自の輝きを増すような仕方での連帯でなければ意味がない。

府が、何かうんと悪い法案でも出してくれた時だけガゼン活気づいてくる。従って運動がプツンプツンと切れてしまう。——運動のリーダー層が戦前・戦中の「挫折」や「受難」の体験をモチーフとしてきたことや、国民の側にある「もう××はゴメンダ」という心情にもっぱら訴えようとする運動のやり方が、非常に強力なエネルギー源になってきたと同時に、長い目でみると、運動の持続性と創造性を阻害する要因になってきた、少なくともこれからはなっていくであろうと思われる。

政治的世界や理論体系一般に対する不信の念は、天皇制社会においてはそれなりの熾烈な意義をもちえたが、今日の大衆社会状況の下においては、内面支配のメカニズムそのものが天皇制社会のそれとは根本的に変わってきている。思想が流行商品化する今日状況の中では、テーゼや正論をねり上げるよりも、異論やアンチテーゼの花火を次々と打上げる方がはるかにたやすい。一般にテーゼよりアンチテーゼが、正論よりも異論の方が、フレッシュでオリジナルに見える、即ち流行商品としての資格をもつからである。

このような状況の中でアンチの思想は、抑圧されるより逆に、にぎやかに迎えられるそして忘れ去られていくであろう。変革の思想がつねに状況に対するアンチテーゼである以上、アンチテーゼそのものが一般に無意味なのではない。テーゼへの志向をもたないアンチテーゼが空しいのである。自己目的化した否定の思想が空しいのである。

◎正論を生む時代体験は何か

『経済学批判』が、『資本論』として完結するように、アンチテーゼは独自のテーゼを生むことによってはじめて自立する。歴史形成の主導力となるのは結局、たとえどんなに鋭いものでも、異論やアンチテーゼではなくて、ヴィジョンとプログラムとをもったテーゼであり正論である。

ではそのような、テーゼあるいは正論を生みだす原動力となるような時代体験は何か。それは、ある一つの体制ができ上ってしまってから、その内部での被害体験や受益体験ではなくて、ある一つの体制が人間の手によって作られていく時代の体験であろう。

明治国家の創成期に立会った世代は、明治国家のルールの中で育てられた世代とくらべて、体制のワクグミからはみだすような奔放な構想力をもっていた。戦後体験というものは本来、まさにそのような体験である。8・15崩壊後の自然状態の中から、価値や制度が形成されてくる過程の中で、日本人は制度や価値——家族や国家、法や道徳——を与えられた自然としてでなく、人間の手によ

って作りかえられるもの、マジリアル（管理出来る）なものとして体験してきた。

このような戦後状況の中で充電された体験をわれわれの内部で持続し、今日の大衆社会状況そのものの内部に発生する不安や倦怠と有効にかみあわせながら、みずからの正論を形成していくことこそが、戦後体験のまさに独自の課題となろう。それはいやしくも一つの天地を創造する作業である以上、天皇制や西田哲学やスターリン主義の亡霊退治より百倍も困難で辛気くさい仕事だけれども、次の十八年間にわれわれの世代がそれをやりとげないならば、かの二十年間の〈危機の時代〉の原体験から、日本人は永遠にいかなる世界をも創造することができないであろう。

（みた・むねすけ氏＝東京大学大学院在学・社会学専攻）